

アジア・アフリカ言語文化研究所

東京外国語大学

要覧 1981



目 次

概 要

歴史と性格 1

組 織 2

研究活動

共同研究プロジェクト 4

言語情報機械処理 7

言語研修 8

海外学術調査 9

助手等の現地投入 9

外国人研究員 10

施 設

電算機室 11

図 書 室 12

音声学実験室 12

出版物一覧 13

職 員 16

— 表紙写真説明 —

南インドの村の一年生。いつもは、自転車に乗った筆者を見かけると、「チンナ・ジャパニー」と大声を出して追っかけてくるワンバク達であるが、今日は、おそらく生まれて初めてであろう写真撮影のせいか、いささか緊張気味。教室には子供達の机や椅子などなく、ノートも石板で代用しているが、その授業の様子は、外の陽差しよりも明るい。(水島 司)

INSTITUTE FOR THE STUDY OF LANGUAGES
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA

TOKYO GAIKOKUGO DAIGAKU
4, NISHIGAHARA, KITA-KU, TOKYO 114
TEL. 03-917-6111
Cable Address : GENGOBUNKA TOKYO

概 要

歴 史 と 性 格

アジア・アフリカ言語文化研究所は、人文科学・社会科学系では、わが国ではじめての共同利用研究所です。

本研究所の目的はアジアおよびアフリカの言語文化に関する総合研究，ならびにこれらの地域における諸言語の辞典編纂，および教育訓練を行なうことにあります。

すなわち：

- 1) アジア・アフリカの言語，およびそれを通じて，これらの地域の歴史・社会・文化を直接研究すること。
- 2) それらの言語による資料の利用を容易にするための辞典を作ること。
- 3) それらの言語習得を助けるため，言語研修を実施すること。

以上の三点が本研究所の主要な目的です。

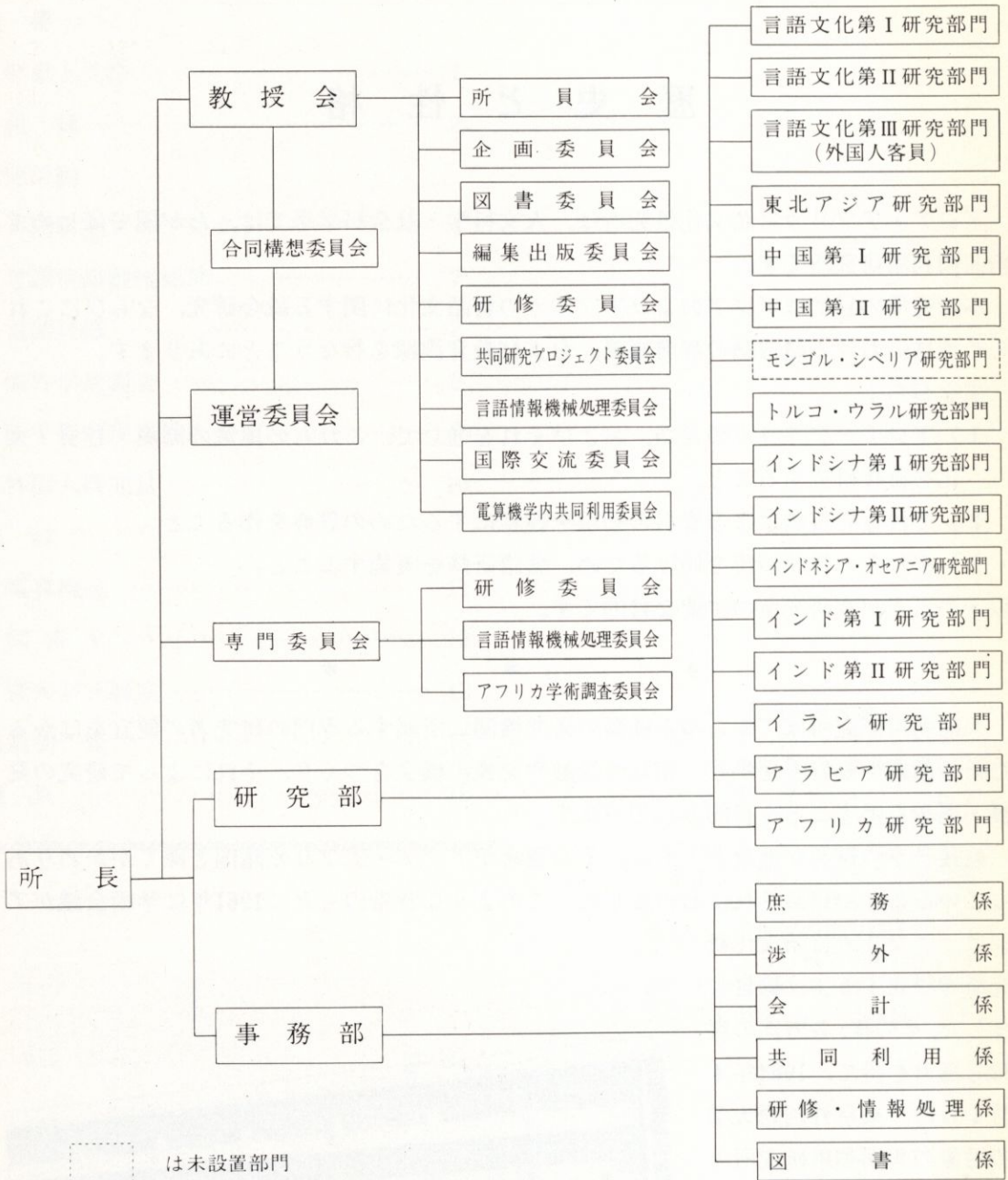
* * *

共同利用研究所は，あらゆる種類の研究機関に所属する専門の研究者の便宜をはかるために設備や資料を提供し，相互の接触や交換の機会をつくり，それによって研究の発展・進歩を促すことを目的としています。

戦後日本の復興が進むとともに，その運命がアジア・アフリカ諸国と深くかかわりあっていることが認識されはじめました。このような背景のもとに1961年に学術会議がアジア・アフリカ言語文化研究所を設立するよう勧告しました。その後，各方面の理解と協力を得て，1964年4月1日に，東京外国語大学の附置の共同利用研究所として本研究所が設立されることになりました。以来，整備拡充が進み，今日では15部門の研究所に成長していますが，今後さらに1部門の増設が予定されています。



組 織



□ は未設置部門

職員数

(1981年4月1日現在)

区分	教 授	助 教 授	講 師	助 手	その他の職員	計
定 員	(2) 14	13	0	12	33	(2) 72
現 員	(2) 13	14	0	12	33	(2) 72

()は外国人客員数を外数で示す

運営委員会

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授で組織する教授会において行なわれますが、共同利用研究所としての公開性を保つため、これとは別に運営委員会が置かれ、研究所の運営の基本方針などの重要な事項について、所長の諮問に答えます。運営委員には研究所の教授・助教授、および所外の学識経験者など、25名以内が委嘱されます。第9期(1981.2~1983.1)の運営委員は以下の通りです。

荒 松 雄	東京大学教授	中 根 千 枝	東京大学教授
石 川 栄 吉	東京都立大学教授	西 田 龍 雄	京都大学教授
伊地智 善 継	大阪外国語大学学長	伴 康 哉	大阪外国語大学教授
井 上 和 子	国際基督教大学教授	坂 野 正 高	国際基督教大学教授
梅 田 博 之	所員	藤 枝 晃	京都大学名誉教授
岡 田 英 弘	所員	松 山 納	東京外国大学教授
小 沢 重 男	東京外国語大学教授	三根谷 徹	国学院大学教授
小 泉 文 夫	東京芸術大学教授	護 雅 夫	日本大学教授
小 堀 巖	東京大学助教授	八 木 健 三	北星学園大学教授
柴 田 武	埼玉大学教授	山 田 信 夫	大阪大学教授
祖父江 孝 男	国立民族学博物館教授	山 本 登	慶応義塾大学名誉教授
田 町 常 夫	九州大学教授	渡 部 忠 世	京都大学教授
富 川 盛 道	所員		

専門委員会

また、所長の諮問に応じて、研究所の共同研究に関する専門的事項を審議する専門委員会が三つあり、それぞれ所外の学識経験者のうちから委嘱されます。1981年度の委員は以下の通りです。

研修委員会

相浦杲(大阪外国語大学教授)、池上二良(北海道大学教授)、大東百合子(津田塾大学学長)、小沢重男、五島忠久(大阪大学名誉教授)、柴田武、柴田紀男(天理大学助教授)、西田龍雄、伴康哉、半田一郎(東京外国語大学教授)、松山納、三根谷徹

言語情報機械処理委員会

植村俊亮(工業技術院電子技術総合研究所主任研究官)、田町常夫、長尾真(京都大学教授)、中山和彦(筑波大学教授)、西村恕彦(東京農工大学教授)、淵一博(工業技術院電子技術総合研究所情報部長)

アフリカ学術調査委員会

石川栄吉、伊谷純一郎(京都大学教授)、小堀巖、柴田武、祖父江孝男、矢内原勝(慶応義塾大学教授)、和崎洋一(富山大学教授)

研 究 活 動

共同研究プロジェクト

共同利用研究所での研究は、所員が個人研究テーマを持って研究を行なうとともに、所外の研究者と協力することになっています。そのために共同研究員の制度があり、共同研究プロジェクトを組織し、研究を進めています。1981年度のプロジェクト（カッコ内は研究代表者）と共同研究員は以下の通りです。

言語研修（北村 甫）

大河内康憲（大阪外大）	杉村博文（大阪外大）	繩田鉄男（熊本大）
大野 徹（大阪外大）	孫 鈞政（大阪外大）	町田和彦（東京外大）
尾崎 實（関西大）	田中敏雄（東京外大）	アミール・モハマッド（和光大・研究生）
是永 駿（大阪外大）	鳥井克之（関西大）	アブドル・サタール・ラジィ（大阪大・大学院生）

辞典編纂プロジェクト（岡田英弘）

阿辻哲次（京都大）	木村英樹（埼玉大）	古屋昭弘（都立大・大学院生）
池沢実芳（東北大・大学院生）	慶谷壽信（都立大）	星 実千代（東京外大）
石沢良昭（鹿児島大）	坂本比奈子（東京外大）	本名信行（金城学院大）
伊東照司（東京外大）	佐々木 猛（福岡大）	松尾良樹（奈良女子大）
糸賀 滋（アジア経済研究所）	杉村博文（大阪外大）	松村 潤（日本大）
岩田 礼（熊本大）	鈴木陽一（松山商科大）	守屋宏則（東京外大）
鶴殿倫次（愛知県立大）	高橋 保（国際大学設立準備財団）	マイケル・シェラード（同志社大）
落合守和（都立大）	武信 彰（麗沢大）	チンタナー・保川（東京外大）
辛島 昇（東京大）	中川正之（神戸大）	吉田絹枝（神奈川県立霧ヶ丘高校）
川本栄三郎（岩手大）	ネアック・ソック・チョムラン	藍 清漢（立正大）
川本邦衛（慶応大）	氷上 正（都立大・大学院生）	渡辺茂彦（北九州大）
神田信夫（明治大）	福田権一（中京大）	

言語処理研究（松下周二）

井上史雄（東京外大）	沢村正信（神戸商科大）	中島 久（東京外大AA研・研究生）
及川昭文（筑波大）	清水克正（名古屋学院大）	八村広三郎（国立民族学博物館）
荻野綱男（東京大）	杉田繁治（国立民族学博物館）	堀口秀嗣（東京学芸大）

アジア・アフリカにおけるイスラム化と近代化に関する調査研究（三木 亘）

池田 修（大阪外大）	禿 仁志（東京外大AA研・研究生）	小松久男（東海大）
片倉もとこ（国立民族学博物館）	木村喜博（アジア経済研究所）	坂本 勉（慶応大）
可児弘明（慶応大）	後藤 明（山形大）	佐藤次高（東京大）
加納弘勝（アジア経済研究所）	後藤 晃（神奈川大）	高井清仁（拓殖大）

谷 泰 (京都大)	原 隆一 (九州共立大)	松井 健 (京都大)
柘植洋一 (東京大)	平戸幹夫 (拓殖大)	松原正毅 (国立民族学博物館)
富岡倍雄 (神奈川大)	堀内 勝 (東海大)	山形孝夫 (宮城学院女子大)
奴田原睦明 (東京外大)	本多義昭 (京都大)	山田 稔 (東京大)
信森廣光 (福山市立女子短大)	前嶋信次 (慶応大・名誉教授)	渡辺金一 (一橋大)
蓮見治雄 (東京外大)	牧野信也 (東京外大)	

アフリカ学術調査 (富川盛道)

上田 将 (新潟大)	小川 了 (国立民族学博物館)	松園萬亀雄 (都立大)
上田富士子	岸田袈裟 (川島食糧産業研究所)	和崎春日 (神奈川大)
江口一久 (国立民族学博物館)	田中二郎 (弘前大)	和田正平 (国立民族学博物館)
大森元吉 (国際基督教大)	長島信弘 (一橋大)	
岡崎 彰	端 信行 (国立民族学博物館)	

南アジアの大河流域における農村社会の研究 (原 忠彦)

石井米雄 (京都大)	辛島 昇 (東京大)	重松伸司 (名古屋大)
白田雅之 (拓殖大)	桐生 稔 (アジア経済研究所)	谷口晋吉 (一橋大)
長田満江 (アジア経済研究所)	菱口善美 (駒沢大)	柳沢 悠 (横浜市立大)

ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究 (飯島 茂)

関根康正 (学習院女子短大)	西 義郎 (鹿児島大)	三瓶清朝 (玉川大)
立川武蔵 (名古屋大)	西田龍雄 (京都大)	御牧克己 (京都大)
長野泰彦 (国立民族学博物館)	星 実千代 (東京外大)	山口瑞鳳 (東京大)

日本の言語文化比較研究資料の充実 (岡田英弘)

斯波義信 (大阪大)	松本克己 (金沢大)	渡部忠世 (京都大)
末成道男 (聖心女子大)		

アジアの民族運動とその国際関係 (中村平次)

伊藤秀一 (神戸大)	清水 透 (東京外大)	毛里和子 (日本国際問題研究所)
小田英郎 (慶応大)	中村 義 (東京学芸大)	山内昌之 (聖心女子大)
木畑洋一 (東京外大)	八尾師 誠	由井正臣 (早稲田大)
木村英亮 (横浜国立大)	藤田 進 (東京外大)	
桐山 昇 (名城大)	松本脩作 (アジア経済研究所)	

アジア・アフリカにおける象徴と世界観の比較研究 (山口昌男)

青木 保 (大阪大)	木田理文 (慶応大・大学院生)	原 広司 (東京大)
市川 浩 (明治大)	久米 博 (桐朋学園大)	松田 修 (法政大)
市川雅章 (お茶の水女子大)	栗本慎一郎 (明治大)	宮田 登 (筑波大)
今福龍太 (日本総合研究所)	中村雄二郎 (明治大)	吉田敦彦 (成蹊大)

言語文化調査票 (石垣幸雄)

飯沼英三 (東京外大)	金 東俊 (拓殖大)
-------------	------------

アジア・アフリカ諸言語の研究 (奈良 毅)

上野善道 (金沢大)	土田 滋 (東京大)	原 誠 (東京外大)
大河内康憲 (大阪外大)	角田太作 (名古屋大)	福原信義 (大阪外大)
奥平龍二 (東京外大)	徳永宗雄 (岐阜大)	溝上富夫 (大阪外大)
小田真弘 (中京大)	鳥羽季義 (国際言語研究協会)	三谷恭之 (京都市)
カリヤン・ダスグプタ (法政大)	富田健次 (大阪外大)	宮岡伯人 (小樽商科大)
崎山 理 (広島大)	長 弘毅 (アジア・アフリカ語学院)	村崎恭子 (東京外大)
柴田紀男 (天理大)	中島 久 (東京外大AA研・研究生)	森口恒一 (熊本大)
下宮忠雄 (学習院大)	繩田鉄男 (熊本大)	山田幸宏 (高知大)
杉田 洋 (東京学芸大)	橋本 勝 (大阪外大)	吉川 守 (広島大)
田村すず子 (早稲田大)	早田輝洋 (九州大)	

なお、1978年度より上記プロジェクトとは一応別に、当研究所において一定期間研究を行なう共同研究員を公募することになり、本年度は次の諸氏が委嘱されています。

井谷鋼造 (京都大) 川瀬豊子 (日本学術振興会奨励研究員) 安元直子 (九州大・大学院生)
内堀基光 (岐阜大)

研 究 生

また研究生の制度があり、大学卒業かそれと同等以上の学力のある者が研究所で研究に従事することを希望するときは、研究生として入所を許可することがあります。研究生は入所料と研究料を納付し、指定の教官の指導を受けます。



上：ネパール中央部のパールバット^{ワラ}県、ツワ村で出会ったダマイ (仕立屋カースト) の少年たち。
ドコと呼ばれる逆円錐形の竹製のカゴを背負い、水牛の飼料 (ガーンズ——草または葉つきの木の枝) を取りに行くところ。 (石井 溥)
左：牛6頭を巡回運動させての脱穀作業。場所は、舗装してある道路の交差点。
(南インドで、水島 司)

言語情報機械処理

現代の電子工学の技術と数理情報の理論を高度に活用して、アジア・アフリカの諸言語のデータを大量に機械処理し、それぞれの言語の音韻論的、辞学的、統辞論的分析はもちろんのこと歴史的、民族学的、社会学的研究のような多目的な用途に供せられるデータ・ベースの作製をはかっています。当研究所としては、最も重要な事業の一つであるアジア・アフリカの諸言語の辞典や文典の編纂に基礎資料を提供して、この方面におけるわが国の立ち後れを克服し、またアジア・アフリカ諸国との多面的、多角的交流という社会的要請にこたえようとしているわけですが、同時にこれは全国の研究者の共同利用にも供されます。この目的のために、一方で各言語のデータについて一定の音韻論的、統辞論的、意味論的、語彙論的情報を分析・形式化し、他方ではこれらの情報を実際の研究に使いやすいようにプリント・アウトするために、デーバナーガリー（ヒンディー、サンスクリット）、ベンガル、タイ、クメール、チベット、アラビア、ハングルなどの文字フォントを作製し実際に使用しています。実際の言語の例としては、ベンガル語、中国語、朝鮮語、ハウサ語、ヒンディー語、クメール語、アラビア語、ペルシア語、スワヒリ語、タイ語、チベット語などのデータが蓄積されつつあります。

言語データのプリント・アウト例

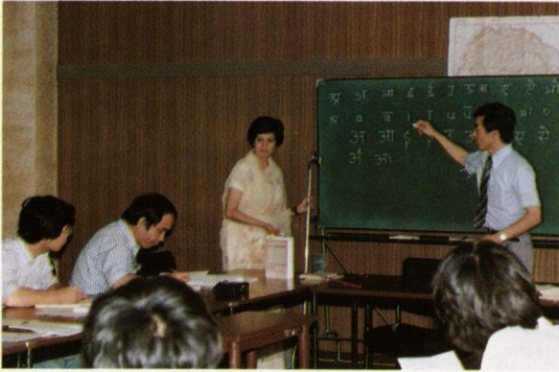
アラビア語	العبرو ١ . مع شجرة تدعى الككام يجلب من السن :	MAFATHI10205
	سورة الكفرة و الأول أمح و بسى أبعا التنين و هذه ١ . ورته فى الامل واحدى العدين تسمى الرأسر و	MAFATHI12807
	١ و هو شجرة يسيل من الزجاج و هو ملح ابيض سلب ١ . اثب قوى و منها التگ و هو حيران امنر و ابه	MAFATHI14815
	و الامال ١ . وى من آلامهم يعمل من زجاج أو فعات على هيئة	MAFATHI14614
	و من عبويه التكرير و هو ١ . اداة الالفاظ و حروف السلات و الأدوات فى موا	MAFATHI04915
	م و الغائم بالنعل فى وقته ذلك كهذا العاط و هذ ١ . الجبل و ذلك الانسان	MAFATHI08305
	الشدية كموكك و اعلاماه و اباه و ابناه و ازبداه	MAFATHI03602

中国語 0100 子曰「學而時習之、不亦說乎。有朋自遠方來、不亦樂乎。人不知而不慍、不亦君子乎。」

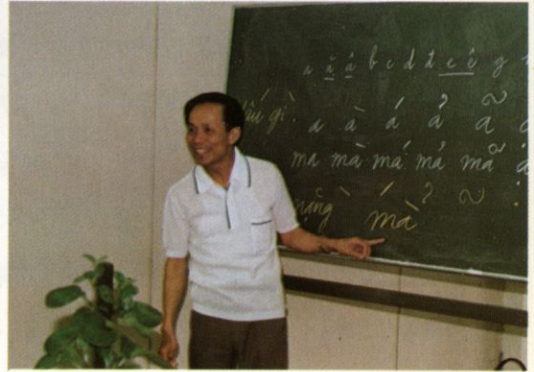
0200 有子曰「其爲人也、孝弟而好犯上者鮮矣。不好犯上而好作亂者、未之有也。君子務本。本立而道生。孝弟也者、其爲仁之本與。」

0300 子曰「巧言令色、鮮矣仁。」

言語研修



左：ネパール語
下：ベトナム語



アジア・アフリカの言語の習得のための教育訓練は、わが国では開発がおくれていた分野ですが、その技術の開発のために、1967年からほぼ毎夏、実験的に、朝鮮語、ベンガル語、現代ヘブライ語、アムハラ語、スワヒリ語、ビルマ語、福建語、チベット語の研修を、それぞれ一言語か二言語ずつ実施しました。1974年からは本格的に行なうことになり、当研究所員を中心にその言語を母語とする人、及び日本人研究者の協力をえて、東京(二言語)と大阪(一言語)で、初級コースを下記のとおり実施してきました。

1974年度	朝鮮語、チベット語(東京)
1975年度	カンボジア語、ベンガル語(東京)
1976年度	ペルシア語、スワヒリ語(東京)、ビルマ語(大阪)
1977年度	広東語、マラーティー語(東京)、モンゴル語(大阪)
1978年度	タイ語、トルコ語(東京)、ペルシア語(大阪)
1979年度	ハウサ語、ビルマ語(東京)、タイ語(大阪)
1980年度	ネパール語、モンゴル語(東京)、ベトナム語(大阪)

1981年度は東京でヒンディー語・パシュトー語の初級コース、大阪で中国語の中級コースが行なわれ、また1982年度には初級コースとして、東京ではアラビア語・ハンガリー語、大阪ではフラニ語が行なわれます。

全国から公募された各言語約10名の研修生は検定料、入所料、受講料を納付し、全課程を終えた人には修了証書が授与されます。

各コースの研修時間については1980年度までは226時間でしたが、1981年度以降は150時間です。

海外学術調査

本研究所は、その性格上、アジア・アフリカの現地調査を行なうことが重要な機能のひとつとなっています。これまでに当研究所の所員によって組織された海外学術調査は以下の通りです。

- (1) アフリカ部族社会の比較調査 1969年～1977年
- (2) ヨーロッパ東南部農村調査 1970年
- (3) 東南アジア・ナショナリズムの形成過程における地域社会の変動 1972年
- (4) イスラム圏社会・文化変容の比較調査 1974年～
- (5) 中国・インド文明接触地帯における自然、生態と文化に関する調査 1975年～1976年
- (6) 南アジア河川流域米作地帯の農村社会の研究 1979年～
- (7) ネパールにおける国民形成過程の人類学的言語学的調査 1980年～
—ガンダキ水系諸地域住民のネパール化に関する比較研究—
- (8) スーダン・サーヘル地帯における移住と地域形成の調査研究 1981年～
—ハウサ・フラニ語圏を中心に—

助手等の現地投入

アジア・アフリカの言語を自由に話し、読み、書くことができ、かつ、生活を通じてその文化を吸収した研究者を養成するために、本研究所は助手等の若い研究者を、それぞれ2年の期間、アジア・アフリカの諸国に送っています。

この計画は1967年から実施され、現在までに合計16名がエチオピア、タンザニア、ナイジェリア、エジプト・アラブ、インド、モロッコ、香港、ケニア、ボツワナ、ザンビア、ザイール、ビルマ、ネパール、イラン、トルコ、ニューカレドニア等々の諸国に派遣され、そのうち2名は目下現地で研修中です。

外国人研究員

研究所は、その共同利用研究活動の一環として、外国のアジア・アフリカの言語文化研究の専門家を外国人研究員として受け入れ、研究上の便宜を供与します。現在まで受け入れた外国人研究員は以下の通りです。

- Gordon T. Bowles : アメリカ 人類学専攻 1967年10月6日～1968年9月15日
Muhammad Ahmad Anis : エジプト 近代史専攻 1968年10月2日～12月25日
Raouf 'Abbās Hāmid : エジプト 近代史専攻 1973年4月1日～9月19日
Yellava Subbarayalu : インド 南インド中世史専攻 1973年10月1日～1975年10月31日
Fe Aldave-Yap : フィリピン フィリピン国語学専攻 1975年9月20日～12月21日
金完鎮 : 大韓民国 韓国語学専攻 1975年8月20日～1976年7月31日
Curtis D. McFarland : アメリカ 言語学専攻
1976年2月20日～1977年2月19日, 1979年10月1日～1980年9月30日
'Abd al-Raḥīm 'Abd al-Raḥmān 'Abd al-Raḥīm : エジプト
中東近代経済史, アラビア語学専攻 1976年6月6日～10月4日
Salim Abdulla Wazir : タンザニア 教育学専攻 1976年6月4日～10月11日
Bhakti Prasad Mallik : インド 言語学専攻 1976年7月13日～12月20日
Karthigesu Indrapala : スリランカ 歴史学専攻 1976年11月1日～1977年3月31日
俞昌均 : 大韓民国 韓国語学専攻 1977年4月1日～1978年1月31日
Søren C. Egerod : デンマーク 東洋言語学, 古典学専攻 1977年9月1日～1978年5月31日
Bozkurt Güvenç : トルコ 社会人類学専攻
1978年5月17日～10月31日, 1980年10月1日～1981年9月30日
Thubten Jigme Norbu : アメリカ チベット学専攻 1978年6月27日～1979年3月31日
André-Georges Haudricourt : フランス 言語学, 植物学, 民族学専攻
1978年10月2日～10月31日
Maria Lourdes S. Bautista : フィリピン 言語学専攻 1978年10月23日～1979年5月12日
William S-Y. Wang : アメリカ 言語学, 音声学, 神経言語学専攻 1979年2月15日～7月14日
Alhaji Faruk Gezawa : ナイジェリア ハウサ語学専攻 1979年4月12日～12月17日
Shyamsunder Joshi : インド ヒンディー文学専攻 1979年5月26日～8月25日
Dor Bahadur Bista : ネパール 社会人類学専攻 1979年5月30日～6月20日
Jean-Baptiste Bunkungu : オートボルタ モシ語学専攻 1979年6月1日～9月30日
Paul M. Thompson : アメリカ 中国哲学・文学専攻 1979年9月16日～1980年9月15日
Chandra Mudaliar : インド 国際関係論, 政治学専攻 1979年10月1日～1980年9月30日
Udom Warotamasikkhadit : タイ 言語学専攻 1979年11月6日～11月28日
Thomas Sebeok : アメリカ 言語学, 記号学専攻 1980年4月13日～4月27日
傅懋勳 : 中国 言語学, 民族学専攻 1980年6月11日～1981年3月10日
Samuel H. Elbert : アメリカ ポリネシア諸語専攻 1980年10月1日～1981年1月31日
Kripal C. Yadav : インド 歴史学専攻 1980年10月1日～1981年9月30日
Alain Peyraube : フランス 中国言語学専攻 1980年10月11日～12月10日
徐在克 : 大韓民国 韓国語学専攻 1981年5月25日～1982年3月15日
Muhammad B. Mkelle : タンザニア スワヒリ語学専攻 1981年6月19日～12月18日

施設

電 算 機 室



上：電算機室
左：タイ語データの校正作業中のグラフィック・ディスプレイ端末

当研究所では、1978年1月から、HITAC M-150システムを導入しました。内部メモリーは512KB、ディスク装置は4スピンドルで合計800MB、磁気テープは2デッキあります。入力にはパンチカード、マークカード、紙テープ、TSS端末が使えます。出力のためにはラインプリンタの他に漢字プリンタがありますが、これを使用して、大きさも形も様々なAA諸言語の文字を印刷できるようなソフトウェアが開発されています。

このほかのソフトウェアとしては単語の用例検索システムが準備されています。これはAA諸言語をローマ字や数字におきかえることをせずに、原字のままでパンチ、入力し、データベース化するもので、必要に応じて何時でも任意の単語(列)の用例を検索し、それぞれの固有の文字で印刷することができます。このシステムは、文法研究や辞典編纂の資料作成ばかりでなく、史料や調査記録の索引を作ることもでき、言語学ばかりでなく、歴史学や文化人類学の研究にも活用できます。

またグラフィック・ディスプレイもあり、AA諸言語の研修の自動化等の開発研究も行なわれています。

1979年度に導入された画像処理システムは、アジア・アフリカの固有の文字フォント作製に威力を発揮しています。

図 書 室

アジア・アフリカ研究に必要な図書および図書利用のための設備は、共同利用研究機関として重要な要素です。研究所開設以来図書資料は徐々に増加していますが、その充実については今後とも多大な努力を要します。蔵書の中にはアジア・アフリカ地域の国語教育資料、雑誌(約550種)、新聞(約60種)、世界各国語の聖書、などが含まれています。図書の他に、マイクロ資料もあり、また利用者の便宜を考えてマイクロリーダーとリーダー・プリンターを備えています。

音 声 学 実 験 室

「ヨルバ語のトーンなんですが、基本周波数の動きは？」

「広東語の声調の上がり下がりを目で見て確かめたいんですが…」

「フラニ語ってどんなことばですか？ 実際に録音したのがありますか？」

「言語研修に使う教材を、良い条件で録音したいんだけど……」

こんな例は、音声学実験室の活動のほんの一部分にすぎません。サウンド・スペクトログラフやピッチ・インディケーターをはじめとした音声分析用機器が、フィールド調査で収集された音声資料の処理にあたっています。また、めずらしい言語や、貴重な民話・民族音楽などのテープが複写され、ビデオ録画なども利用しながら研究分析を行っています。

また付属施設の“音声・言語研修資料室”には各種の語学レコードおよび録音テープがあり、研究者の利用の便をはかっています。

出版 物 一 覧

アジア・アフリカ言語文化研究 *Journal of Asian and African Studies*, Nos. 1(1968), 2(1969), 3(1970), 4(1971), 5(1972), 6(1973), 7(1974), 8(1974), 9(1974), 10(1975), 11(1976), 12(1976), 13(1977), 14(1977), 15(1978), 16(1978), 17(1979), 18(1979), 19(1980), 20(1980), 21(1981).

アジア・アフリカ言語文化研究所 通信, Nos. 1~41. (1966~81).

アジア・アフリカ言語文化叢書

1. ビア・アヌマーン・ラーチャトン著・河部利夫訳註, タイ農民の生活, 1967.
2. 家島彦一訳註, イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記, 1969.
3. MATSUSHITA, S., *An Outline of Gwandara Phonemics and Gwandara-English Vocabulary*, 1972.
4. NAKANO, A., *Conversational Texts in Eastern Neo-Aramaic (Gzira Dialect)*, 1973.
5. TSUCHIDA, S., *Reconstruction of Proto-Tsouic Phonology*, 1976.
6. NAGATA, Y., *Muhsin-Zâde Mehmed Paşa ve Âyânlık Müessesesi*, 1976.
7. YAJIMA, H., *A Chronicle of the Rasûlid Dynasty of Yemen*, 1976.
8. MCFARLAND, Curtis D., *A Provisional Classification of Tagalog Verbs*, 1976.
9. MCFARLAND, Curtis D., *Northern Philippine Linguistic Geography*, 1977.
10. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*, Vol. 1, 1978.
11. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*, Vol. 2, 1979.
12. KAWADA, J., *Genèse et évolution du système politique des Mosi méridionaux (Haute Volta)*, 1979.
13. BAUTISTA, Maria L., *Patterns of Speaking in pilipino Radio Dramas : A Sociolinguistic Analysis*, 1979.
14. 石井 溥, ネワール村落の社会構造とその変化——カースト社会の変容——, 1980.
15. MCFARLAND, Curtis D., *A Linguistic Atlas of the Philippines*, 1980.

アジア・アフリカ基礎語彙集

1. 山本謙吾, 満洲語口語基礎語彙集, 1969.
2. 梅田博之, 現代朝鮮語基礎語彙集, 1971.
3. 橋本萬太郎, 客家語基礎語彙集, 1972.
4. 和田正平, イラク語基礎語彙集, 1973.
5. 石垣幸雄, エチオピア比較語句集, 1974.
6. 守野庸雄, スワヒリ語基礎語彙用例集, 1975.
7. 坂本恭章, モン語語彙集, 1976.
8. 中嶋幹起, 閩語東山島方言基礎語彙集, 1977.
9. 奈良 毅, *Avahattha and Comparative Vocabulary of New Indo-Aryan Languages*, 1979.
10. 中嶋幹起, 福建漢語方言基礎語彙集, 1979.
11. 橋本萬太郎, ベエ語語彙集, 1980.
12. 新谷忠彦, ラデ語—ベトナム語—日本語語彙, 1981.

共同研究報告

1. アジア・アフリカ諸国における国語教育資料の調査研究——中間報告, 1966.
アジア・アフリカ諸国——国語教育資料目録, 1967.
2. アジア・アフリカ言語調査票, 上(1966), 下(1967).
3. 「イスラム化」に関する共同研究報告, Nos. 1(1968), 2(1969), 3(1970), 4(1971), 5(1972), 6(1973).
4. 現代インド・パキスタン文学共同研究報告, Nos. 1(1970), 2(1971), 3(1972).
5. アジア・アフリカにおける宗教運動共同研究報告, Nos. 1(1972), 2(1972), 3(1973).
6. アジア・アフリカ文法研究, Nos. 1(1972), 2(1973), 3(1974), 4(1975), 5(1976), 6(1977), 7(1978), 8(1979), 9(1980).
7. *Asian and African Grammatical Manual* (アジア・アフリカ文法便覧), 1972~:
No. 11. Korean (梅田博之), 1973.
11z. Ainu (村崎恭子), 1978.
12b. Fukienese (中嶋幹起), 1976.
12z. Tibetan (北村 甫), 1977.
13. Indo-Aryan (石垣幸雄), 1980.
13a. Hindi (溝上富夫), 1980.
13b. Marathi (内藤雅雄), 1976.
13c. Bengali (奈良 毅), 1979.
13d. Khaling (鳥羽季義), 1979.
13e. Panjabi (溝上富夫), 1981.
13x. Tamil (徳永宗雄), 1981.
13y. Malayalam (伊藤正二), 1978.
14a. Cambodian (坂本恭章), 1974.
14b. Burmese (藪 司郎), 1974.
14c. Thai (森 幹男), 1975.
15b. Philippine (山田幸宏, 土田 滋), 1975.
16b. Samoan (小田真弘), 1977.
17. Persian (上岡弘二), 1976.
17b. Baluchi (縄田鉄男), 1981.
17s. Shughni (縄田鉄男), 1980.
20. African (石垣幸雄), 1975.
21. Swahili (守野庸雄), 1976.
22a. Cushitic (石垣幸雄), 1972.
22b. Ethiopic (石垣幸雄), 1978.
23. Hausa (松下周二), 1974.
26. Fulfulde (江口一久), 1974.
33. Romance & Greek (石垣幸雄), 1973.
33y. Basque (石垣幸雄), 1979.
33z. Maltese (石垣幸雄), 1977.
34a. Albanian (石垣幸雄), 1979.
36. Uralic etc. (石垣幸雄), 1976.
40. USSR Major (石垣幸雄), 1980.

8. アフリカ部族社会の比較研究：1. アフリカ部族社会の特質をめぐって(1971), 2. アフリカ社会の地域性(1973).
9. トルコ民族とイスラムに関する共同研究報告, 1 (1974).
10. アジア・アフリカ語の計数研究, 1(1975), 2(1975), 3(1976), 4(鄒嘉彦：老乞大諺解単語索引, 1976), 5 (坂本恭章：カンボジア語小辞典, 1976), 6(1976), 7(1977), 8(1978), 9(1978), 10(1979), 11(1979), 12(Anne O. Yue: *The Teng-Xian Dialect of Chinese*, 1979), 13(1980), 14(藍清漢：中国語宜蘭方言語彙集, 1980), 15(Michael Sherard: *A Synchronic Phonology of Modern Colloquial Shanghai*, 1980), 16(1981), 17(傅懋勳：納西族图画文字《白蝙蝠取經記》研究(上冊), 1981), 18(徐琳・木玉璋：僂僂族《創世記》研究, 1981).
11. *Oceanic Studies*, No. 1 (1976).
12. インド・パキスタン分離独立の史的研究 資料集 1(1976), 2(1977).
13. 南アジアの大河流域における農村社会の研究：南アジア農村社会の研究, 1(1977), 2(1978), 3(1979), 4(1979), 5(1980).
14. ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究：YAK, 1(1977), 2(1978), 3(1979), 4(1980).
15. アフリカ社会の形成と展開—地域・都市・言語 (1980).

African Languages and Ethnography

1. EGUCHI, P. K., *Miscellany of Maroua Fulfulde (Northern Cameroun)*, 1974.
2. MATSUSHITA, S., *A Comparative Vocabulary of Gwandara Dialects*, 1975.
3. MOHAMMADOU, E., *L'Histoire des Peuls Férôbe du Diamaré: Maroua et Pètté*, 1976.
4. EGUCHI, P. K., tr., *Shi'r al-Tāba (Poem of Repentance)*, 1976.
5. WADA, S., *Hadithi za Mapokeo ya Wairaqw (Iraqw folktales in Tanzania)*, 1976.
6. NAKANO, A., *Dialogues in Moroccan Shilha (Dialects of Anti-Atlas and Ait-Warain)*, 1976.
7. TANAKA, J., *A San Vocabulary of the Central Kalahari-G//ana and G//wi Dialects*, 1978.
8. MOHAMMADOU, E., *Les Royaumes Foulbe du Plateau de L'Adamaoua au XIX siècle*, 1978.
9. MATSUSHITA, S., *In a Small Town on the Benue—Fula Texts from Gongola State, Northern Nigeria*, 1978.
10. HINO, S., *The Classified Vocabulary of the Mbum Language in Mbang Mboum—with Ethnographical Descriptions*, 1978.
11. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroun I*, 1978.
12. MOHAMMADOU, E., *Catalogue des Archives Coloniales Allemands du Cameroun*, 1978.
13. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroun II*, 1980.

Studia Culturae Islamicae

1. NAKANO, A., *Basic Vocabulary in Standard Somali (I)*, 1976.
2. MIKI, W., *Index of the Arab Herbalist's Materials*, 1976.
3. YAJIMA, H., *The Arab Dhow Trade in the Indian Ocean*, 1976.
4. NAGATA, Y., *Some Documents on the Big Farms (Çiftlik) of the Notables in Western Anatolia*, 1976.
5. MIYAJI, K., "Kacem Ali"—*Monographie d'un domaine autogéré de la plaine de Mitidja (Algérie)*, 1976.
6. MIYAJI, M., *L'Emigration et le changement socio-culturel d'un village Kabyle (Algérie)*, 1976.
7. MIKI, W. & 'Abd al-Rahim., *Village in Ottoman Egypt and Tokugawa Japan—A Comparative Study*, 1977.
8. MIKI, W., HONDA G. & M. Salah Ahmed, *Herb Drugs and Herbalists in the Middle East*, 1979.
9. 上岡弘二, 家島彦一, インド洋西海域における地域間交流の構造と機能——タウ調査報告2——, 1979.
10. KAMIOKA, K. & YAMADA, M., *Lārestāni Studies I. Lāri Basic Vocabulary*, 1979.
11. NAGATA, Y., *Materials on the Bosnian Notables*, 1979.
12. SHIMIZU, K., *Bibliography on Saljuq Studies*, 1979.
13. HANEDA, K., *Tabrizi Vocabulary, an Azeri-Turkish Dialect in Iran*, 1979.
14. NAKANO, A., *Report on Moroccan Urban and Rural Life I—Ethnographic Texts in Moroccan Arabic*, 1979.

Monumenta Serindica

1. IJIMA, S. (ed.), *Changing Aspects of Modern Nepal—Relating to the Ecology, Agriculture and Her people*, 1977.
2. HASHIMOTO, M. (compl.), *The Newari language—A Classified Lexicon of its Bhadgaon Dialect*, 1977.
3. KITAMURA, H. (ed.), *Glo Skad—A Material of a Tibetan Dialect in the Nepal Himalayas*, 1977.
4. MATISOFF, J. A., *Mpi and Lolo-Burmese Microlinguistics*, 1978.
5. HOSHI, M. & Tondup Tsering, *Zangskar Vocabulary—A Tibetan Dialect Spoken in Kashmir*, 1978.
6. KITAMURA, H., NISHIDA, T. & NISHI, Y. (ed.), *Tibeto-Burman Studies I*, 1979.
7. NAGANO, Y., *Amdo Sherpa Dialect—A Material for Tibetan Dialectology*, 1980.
8. NISHIDA, T., *The Structure of the Hsi-hsia (Tangut) Characters*, 1980.
9. THURGOOD, G., *Notes on the Origins of Burmese Creaky Tone*, 1981.

言語研修テキスト

1. チベット語, 北村甫ほか編, 全5冊(1974).
2. 朝鮮語, 梅田博之ほか編, 全3冊(1974).
3. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全5冊(1975).
4. ベンガル語, 奈良毅編, 1冊(1975).
5. ビルマ語, 大野徹ほか編, 全5冊(1976).
6. ペルシア語, 上岡弘二ほか編, 全3冊(1976).
7. スワヒリ語, 守野庸雄ほか編, 全2冊(1976).
8. 広東語, 中島幹起ほか編, 全4冊(1977).
9. マラーティー語, 内藤雅雄ほか編, 全3冊(1977).
10. モンゴル語, 荒井伸一ほか編, 全4冊(1977).
11. トルコ語, 永田雄三ほか編, 全3冊(1978).
12. タイ語, 坂本恭章ほか編, 全2冊(1978).
13. ペルシア語, 勝藤猛ほか編, 全3冊(1978).
14. ハウサ語, 松下周二ほか編, 全3冊(1979).
15. ビルマ語, 藪司郎編, 全3冊(1979).
16. ネパール語, 石井博ほか編, 全3冊(1980).
17. モンゴル語, 小沢重男ほか編, 全2冊(1980).
18. ベトナム語, 川本邦衛ほか編, 全4冊(1980).

特定研究「言語」出版物

「文字と言語」研究資料

1. HASHIMOTO, M. J., *hPags-pa Chinese*, 1978.
2. 橋本萬太郎編, 東干語文字の音表化(資料集), 1978.
3. 橋本萬太郎編, ラテン化新文字(資料集), 1978.
4. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語「漢字語」語彙集(I), 1979.
5. SCHAANK, Simon H., *The Lu-Feng Dialect of Hakka*, 1979.
6. 吉田 忠, 蘭学における訳語の考察, 1980.
7. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語・「漢字語」語彙集(II), 1980.

「AA 諸言語と日本語の学習」資料

- | | | |
|---|---------------|-------|
| 77-1. 梅田 博之: 基本動詞対照用例集 | 日本語-朝鮮語 1. | 1978. |
| 77-2. 大河内康憲: 基本動詞対照用例集 | 日本語-中国語 1. | 1978. |
| 77-3. 坂本 恭章: 基本動詞対照用例集 | 日本語-タイ語 1. | 1978. |
| 78-1. 梅田 博之: 基本動詞対照用例集 | 日本語-朝鮮語 2. | 1979. |
| 78-2. 大河内康憲: 基本動詞対照用例集 | 日本語-中国語 2. | 1979. |
| 78-5. 奈良 毅: 基本動詞対照用例集 | 日本語-ヒンディ語 1. | 1979. |
| 78-6. 内記 良一: 基本動詞対照用例集 | 日本語-アラビア語 1. | 1979. |
| 78-7. 守野 庸雄: 基本動詞対照用例集 | 日本語-スワヒリ語 1. | 1979. |
| 78-8. 梅田博之ほか: 助詞対照用例集 1: 「の」 | 日本語-AA 諸言語 | 1979. |
| 79-1ab. 梅田博之ほか: 日本語の発音(朝鮮語を母語とする学習者のための日本語発音教材試案) | | 1980. |
| 79-3. 坂本 恭章: 基本動詞対照用例集 | 日本語-タイ語 2. | 1980. |
| 79-5. 奈良 毅: 基本動詞対照用例集 | 日本語-ヒンディー語 2. | 1979. |
| 79-6. 内記 良一: 基本動詞対照用例集 | 日本語-アラビア語 2. | 1980. |
| 79-7. 守野 庸雄: 基本動詞対照用例集 | 日本語-スワヒリ語 2. | 1980. |
| 79-8. 梅田博之ほか: AA 諸言語教育基本語彙表 | | 1980. |

Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in India

1. KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Land Control and Social Change in the Lower Kaveri Valley from the 12th Centuries*, 1980.
2. HARA, T. & KOMOGUCHI, Y., *Socio-Economic Studies of Two Villages Esnakorai and Peruvalanallur, Lalgudi Taluk*, 1981.
3. 柳沢 悠, 南インド・カーヴェリ河流域の農村社会の史的変容——アパドゥライ村の土地所有関係を中心にして——, 1981.

職 員

所長 (併) 北 村 甫

研 究 部 (五十音順)

教授 飯 島 茂 樹 : アジアの国民形成
 教授 石 垣 幸 雄 : 文論
 教授 梅 田 博 之 : 朝鮮語
 教授 大 江 孝 男 : 朝鮮語
 教授 岡 田 英 弘 : 東アジア史
 教授 北 村 甫 : チベット語
 教授 坂 本 恭 章 : アウストロアジア諸語
 教授 富 川 盛 道 : アフリカの社会と文化
 教授 中 村 平 次 : インド現代史
 教授 奈 良 毅 : インド・アーリア諸語
 教授 橋 本 萬太郎 : シナ・チベット諸語
 教授 日 野 舜 也 : アフリカ都市社会の比較研究
 教授 山 口 昌 男 : 文化記号論
 助教授 池 端 雪 浦 : 東南アジア近・現代史
 助教授 石 井 溥 : 南アジアの人類学
 助教授 加 賀 谷 良 平 : 音響音声学
 助教授 上 岡 弘 二 : イラン語
 助教授 川 田 順 造 : 西アフリカ社会
 助教授 中 嶋 幹 起 : 中国語
 助教授 中 野 暁 雄 : セム・ハム諸語
 助教授 永 田 雄 三 : トルコ近代史
 助教授 原 忠 彦 : イスラム教徒社会
 助教授 松 下 周 二 : アフリカの言語
 助教授 三 木 亘 : イスラム近代史
 助教授 守 野 庸 雄 : 日本語・スワヒリ語対照研究
 助教授 家 島 彦 一 : イスラム中世史
 助教授 湯 川 恭 敏 : 理論言語学、パントゥ諸語

助 手 梶 茂 樹 : パントゥ諸語
 助 手 清 水 宏 祐 : 西アジア史
 助 手 新 谷 忠 彦 : 言語哲学
 助 手 高 知 尾 仁 : アフリカの象徴論
 助 手 辻 伸 久 : 中国語
 助 手 内 藤 雅 雄 : インド近代史
 助 手 中 見 立 夫 : 内陸・東アジアの国際関係史
 助 手 羽 田 亨 一 : イラン史
 助 手 水 島 司 : 南インド近・現代史
 助 手 森 幹 男 : インドシナ比較文化史
 助 手 藪 司 郎 : チベット・ビルマ諸語
 助 手 山 本 勇 次 : 東南アジアの文化人類学



カイロ郊外・イムバーバのラクダ市
 はるばるスーダン人の商人たちによって運ばれてくるラクダは、
 食肉用としても使われている。あわせて、山羊、羊、馬などの市も
 開かれ、活況を呈している。(清水宏祐)

事務部

事務長 坂元 治
文部事務官
事務長補佐 宮森 てる子
文部事務官

庶務係

係長 下野 茂
文部事務官 井上 由美子
文部事務官 関根 彰
文部事務官 福井 光雄
文部事務官 (タイピスト) 谷川 かつ子
文部技官 (自動車運転手) 埜 和雄

渉外係

係長 隅田 浩
文部事務官 松岡 環
文部事務官 佐久間 敬喜

会計係

係長 鈴木 邦叔
文部事務官 田川 恵二
文部事務官 佐藤 秀規
文部事務官 成瀬 智
文部事務官 田村 猛
文部事務官 (守衛) 荒井 義安
用務員 植田 カツエ



香港の盂蘭盆会（農曆七月十五日）。閩南系の中国方言グループ潮州人の中で盛大に行なわれる宗教行事である。（辻 伸久）

共同利用係

係長 石橋 徳三郎
文部事務官 津田 貞子
文部事務官 金井 京子
文部事務官 大村 和子
文部事務官 乙訓 寛雅

研修・情報処理係

係長 浅見 義則
文部事務官 岡田 ほなみ
文部事務官 中嶋 弘子
文部技官 今井 健二

図書係

係長 小倉 三郎
文部事務官 図書主任 石川 恵子
文部事務官 中川 陽子
文部事務官 鈴木 喜久子
文部事務官 須郷 知子
文部事務官 山木 宏明

東京外国語大学

アジア・アフリカ言語文化研究所

東京都北区西ヶ原 4 丁目 51 番 21 号 〒114

TEL 03-917-6111

国電大塚又は王子下車・都電荒川線西ヶ原 4 丁目
(外語大前) から徒歩約 5 分

地下鉄・都営三田線西巢鴨下車 15 分

